

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

【研修参加者】

所属(学部(研究科)・学年): 農林水産学研究科・修士1年

氏名: 有元かれん

授業科目名	海外森林・林業事情
1. 研修先での学習内容及び自身の学習成果について記載して下さい。(250～300字程度)	
<p>ドイツの林業は主に長伐期施業を行っていた。長伐期施業は優良木を決め、その木の成長の妨げになるものを除去して大きく育てる手法である。日本では択伐林施業と言われている。しかし、生物多様性が多すぎることや窒素が吸収されにくいということから日本ではあまり行われていない。また、実際にドイツの山を見て感じたのは山に入りやすいということと、天然更新が行われているのが目に見えてわかるということである。ドイツの山は下層植生が少なく作業道が広いため、一般の人がランニングコースとして使用しているケースが見受けられた。また、若い木が立っており、よく見ると周りにある樹種と同じものだったため、天然更新が行われていることを確認することができた。</p>	
2. 現地での生活を体験して得た気づきや学びを記載して下さい。(250～300字程度)	
<p>ドイツでは、買い物をする際にハローと挨拶をしてから接客をもらい、最後にありがとうと挨拶をしてからお店を後にする。この挨拶に始まり挨拶に終わる感じが素敵な文化だと感じた。また、挨拶に加えて「いい一日を」と声をかけてくれる店員さんもいて、それだけで気分が上がるが、こちらからも声をかけると相手が喜んでくれたので、自分も気分が上がった。日本にそのような文化はないが、何気ない一言でその人の1日の気分を上げることができるかもしれないと思った。また、街中でもお店でも目が合うとニコッと笑ってくれる人が多かったので、何気ないことだがうれしい気持ちになった。</p>	
3. 研修前と後での自身の変化や最も成長した経験について具体的なエピソードをもとに記載して下さい。(250～300字程度)	
<p>自分が成長したのはお店で注文したり、店員さんに探しているものがあるか聞いたりすることに抵抗がなくなったことだ。私は今回、海外に行くのは初めてで不安だった。しかし、ご飯を買うにはお店に入って注文するか、スーパーで買わないといけないため、どちらにしても店員さんと関わらなければならない。初めのうちは英語が聞き取れずにあたふたしていたが、どんどん慣れてきてスムーズに買い物ができるようになり、店員さんと話す余裕が生まれたり、最終的には何人かの注文をまとめてオーダーしたりできるようになった。滞在したのは約2週間だったが、海外の文化や現地の人たちと関わることができたのはとてもいい経験になったと思う。</p>	
4. 地域社会の発展に寄与するため、今後取り組んでいきたいこと、自身の目標について記載して下さい。(250～300字程度)	
<p>自分の分野についてもっと深く学び、知見を深めたいと思った。今回、研修中には現地の技術や現状などの話を聞くことが多かったが、社会人の方たちの話を聞く機会もあった。色々な話を聞いたときに、自分が知識として知っているものが実際に現場で使われていて、生産性の向上や資源量の把握などに繋がっていることを知った。その時に知識としてではなく、この技術はどういった現場で使われていて、どういう効果があるというのを理解することが重要だと感じた。そのため、自分の分野についてもっと深く学び、より知見を深めたいと思った。</p>	

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

【研修参加者】

所属(学部(研究科)・学年): 農林水産学研究科・修士1年

氏名: 橋本龍平

授業科目名	海外森林・林業事情
1. 研修先での学習内容及び自身の学習成果について記載して下さい。(250～300字程度)	
<p>私はドイツで現地の森林・林業について学習した。7日間月曜日から日曜日まで講義が行われ、ロッテンブルク大学の演習林に行ったり、ドイツの林業機械の見学、ドイツの素晴らしい景観を保つために行われている努力、外来樹種の育成方法、木材を使用した建築技術、山の上にある鉱山の見学など貴重な体験を行うことができた。私は修士論文でシカについて研究しているが、ドイツでもシカが問題になっているものの、日本とは違い、狩猟してよい時期と狩猟を禁じられている時期が決まっており、日本と大きく異なっているなど感じた。建築技術も日本と異なり隣の家との間が1cmもないくらい狭く、効率的にスペースを活用していた。</p>	
2. 現地での生活を体験して得た気づきや学びを記載して下さい。(250～300字程度)	
<p>私が一番印象に残っているのは接客の際に双方が気持ちの良いやり取りが行われるということである。具体的には買い物をする際に、店員もお客も必ずハローなどの言葉を交わし、会計が終わった際には必ずドイツ語や英語で「ありがとう」と言う。また、店員さんがレジを打っている最中には「どこから来たの?」や「日本大好きです」なども言ってもらい、日本と比べてとてもフレンドリーで良いなど感じた。一見当たり前のやり取りにも感じるが、私はコンビニでアルバイトをやっていて、商品を渡してありがとうございますと一言を言ってくれる人は半分もないし、最初から最後まで黙っている方もいるのでドイツで接客業をしたら楽しそうだなと感じた。</p>	
3. 研修前と後での自身の変化や最も成長した経験について具体的なエピソードをもとに記載して下さい。(250～300字程度)	
<p>自分自身が最も変化したと感じるところは英語を心の底から話せるようになりたいと感じたことである。今回のドイツ研修には長崎県の森林関係の職業に就かれている酒井さんという方も参加されていてその方と一緒に行動をさせていただく機会が多かった。酒井さんは英語がペラペラでレストランやバーに行った際にも流暢な英語で注文する姿を見てとてもかっこよかったし、酒井さんがいない場面では注文に時間がかかってしまうことが何度もあったため、自分が英語を話せるようになれば、海外に行った際により楽しめるなど感じた。</p>	
4. 地域社会の発展に寄与するため、今後取り組んでいきたいこと、自身の目標について記載して下さい。(250～300字程度)	
<p>地域の社会の発展に貢献するためにはまずは就職することが最優先であると感じる。学生でも研究などの点で地域社会の発展に寄与することはできると思うが、社会人になって働いてこそ社会のためになると個人的には感じるので、今後は自分の目標である公務員試験を突破して、地元の県庁で働けるように勉強に励みたい。林業職の県庁職員になって地元の人々が安心して過ごせるような山林の手入れであったり、土砂災害防止のためのダム設計など様々な面で貢献していきたい。</p>	

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

【研修参加者】

所属(学部(研究科)・学年): 農林水産学研究科・1年

氏名: 後藤裕輔

授業科目名	海外森林・林業事情
1. 研修先での学習内容及び自身の学習成果について記載して下さい。(250～300字程度)	
とりわけ今回の研修にて学びの目標としていた点が、長伐期あるいは超超伐期林の育成と森林資源の持続的な利活用についてであった。シュバルツバルトでの研修においては、特に森林資源の「多様性」、そのために林層を「多層」「多齢」に仕立てることと、そのための手法としての「将来木施業」について具体的なレクチャーを受けることができた点、大きな収穫を得ることができたと感じている。特に「将来木施業」については、必ずしも収穫木決め打ちの施業を目的としているのではなく、最小限の支障木の除去によって多様な光環境温度環境を作ることにより、時々の社会、経済状況に対応する柔軟さを林業経営に持たせているのだという点が、事前に文献として当たっていたメーラーの「恒続林施業」の思想の一端に触れられたようで、大変貴重な学びであった。	
2. 現地での生活を体験して得た気づきや学びを記載して下さい。(250～300字程度)	
大変興味深かったのが、シュバルツバルトにおける森林施業の条件が、急傾斜地であったり材価が不振であったり鳥獣病虫害の被害があったりと、実は事業を取り巻く環境はさほど我々と変わらないという点である。そうした中で、伝統的な牧畜との林業の複合経営において、設備投資や経営規模と流通において、例えば設備の流用、小規模伐採と地域流通の最適化、さらには生産物の六次加工、労働力の最適化等、できうる限りの現代的な経営の最適化と複合化が図られている点もまた興味深かった。	
3. 研修前と後での自身の変化や最も成長した経験について具体的なエピソードをもとに記載して下さい。(250～300字程度)	
これまでの研究活動におけるフィールド調査のデータのとりまとめの中で、「長伐期施業において林齢が高くなると立木の樹高、胸高直径など成長の度合においてばらつきが増す」という点が発見としてあり、この点について次回の九州森林学会での論文発表の要旨の一つにしようと考えている。今回の海外研修においてシュバルツバルトにおける長伐期、超超伐期林における森林資源の持続可能性において「多様性」という点が特に強調されている点であったことがその「ばらつき」について積極的な価値を見出す大きなきっかけであった点、得難い体験であったと考えている。	
4. 地域社会の発展に寄与するため、今後取り組んでいきたいこと、自身の目標について記載して下さい。(250～300字程度)	
シュバルツバルトでの研修において繰り返し強調されていた、造林における「多様性」について、林層の「多層性」「多齢性」という点に力点を置いた研修内容であったわけだが、特に「多齢性」という点は、林齢構成が戦後造林時期に偏っている東九州地域の山林資源を、今後どのように持続的に利活用していくかという点で重要なテーマになると感じた。今後は地域での事業に関してどのような時間軸と方法論をもって「多齢性」を実現し、地域の森林資源の持続的な利活用を「多層」に図るべく研究活動を進めてゆきたいと考えている。	